

る。

さらに類相互間の関係も社会的起源をもっている。何故ならば人間の集団は相互にいり込んでおり、下位氏族は氏族に接合され、事物の群も氏族、下位氏族の関係の順に従って配列されるのである。こうして社会学者にとっては全体の範疇を知ることが重要となる。事象全体が体系をなしていると考えられるのは社会全体が同様に考えられるからで、論理的層位関係も社会的層位の一面であり、知識の統一性も宇宙に広がる集合体の統一と考えられているからなのである。その様相は社会によって異なるのである。デュルケームとモースはこの論文の終りにこういう疑問を提供する。未開人の分類の構造と科学的分類の構造が同一性が明らかになったが、人びとをして事物をこのように配置させるようにはたらく力は一体何なのであるかということである。⁵⁹⁾ つまりデュルケームたちが知ろうと求めた問題はより文明の進んだ社会において科学的知識の構成的要素となるであろう社会力とは何なのかであると考えられる。⁶⁰⁾ ところがデュルケームたちは現実には集合意識が研究者に対してはたらく直接の指導的作用と規制作用に方向づけをかえたのである。そこでデュルケームの出した解答が感情的先天性 *apriori affectif* であり、感情の類が論理的類を支配することになるというものだった。だが、たとえ分類の外的枠が社会的であっても、それが利用される仕方は必ずしも社会的起源に基づくのではない。社会的分類と自然的分類の中間に分類の作用にかくれて共同の感情作用がはたらくのである。社会的組織の基礎にあるのと同じ感情が事物の組織をも支配することになる。デュルケームとモースが提起した疑問に対する回答はこうなってくる。この感情の作用がデュルケームの「宗教生活」に分類の社会的起源にである集合的感情の場所としての宗教を準備させることになるのである。⁶¹⁾ 「宗教生

活」と分類の未開形態」の結びつきはこのようになるのである。この点についてデュルケームとモースは次のように説明する。「観念が感情的理由によって体系的に配列されるためには観念が純粹である必要はなく、それらは感情の所産であることが大切である。実際未開人にとっては事物の類はたんに認知の対象であるばかりでなく、何よりもある種の感情的態度に対応するものである。未開人が抱く表象の形成にはあらゆる感情の要素が貢献している。宗教的感情もその表象を構成するもっとも本質的な特質を付与するのである。「換言すれば、基本的特性は事物が社会的感情に与える影響の仕方を表現しているにほかならないからである。」⁶²⁾ 分類は感情的であるため、起源においては流動的である。だから科学的分類の歴史は社会的感情が衰退して、自由で反省的な思考が増大する過程の歴史である。つまり、この図式は次のように描ける。「原始における社会的枠と論理的枠の統一性は感情的分類によって確保されていた。しかし後になるに従って集合意識は力を漸次失い、シンボリックとなってくる。これに反して諸制度の形成と集団と結びつく社会的意識 *conscience sociale* の成長が感情に支配されない分類を可能ならしめる。未開社会から近代工業化社会への移行は個人的思考を解放する。そして科学は個人的論述を集合体の表現として成立せしめ、アノミーに対する闘争を有効ならしめるのである。⁶³⁾ これについてモースの「エスキモー社会の研究」⁶⁴⁾ はこのデュルケームの知識社会学に新たな問題を提起してくるのである。モースは「エスキモー社会は雪と氷によって閉ざされる冬季と近海に出て漁のできる夏季との二つの季節によって一方の集中的生活と他方の分散的生活の対立した社会生活を営むのだが、この形態学的特性がエスキモーの宗教、法律および経済生活に影響をおよぼすことを明らかにし、形態学的要因が知識お

59) *Op. cit.*, p. 58

60) *Ibid.*,

61) *Op. cit.*, p. 59

62) E. Durkheim et M. Mauss, 'De quelques formes primitives de la classification' (*Année Sociologique* VI), p. 85

63) G. Namer, *op. cit.*, p. 59

64) M. Mauss, 'Essai sur les variations saisonnières des Sociétés Eskimos' (*Année Sociologique*, IX) (1906)